テラスに立つ少年

中村真一郎

筑摩書房

テラスに立つ少年

中村真一郎

筑摩書房

テラスに立つ少年

一九九五年八月二十五日　初版第一刷発行

著　者　中村真一郎
発行者　森本政彦
発行所　株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三
郵便番号　一一一
振替　〇〇一六〇―八―四一二三
明和印刷／矢嶋製本

©SHINICHIRO NAKAMURA 1995
ISBN 4-480-81384-5　C0095

ご注文・お問合せ、乱丁・落丁本の交換は左記へ
大宮市櫛引町二―六〇四　郵便番号三三一
筑摩書房サービスセンター　電話〇四八―六五一―〇〇五三

目次

I

1 断絶の現代 5
2 友よ、安部公房 7
3 老年の生の愉しみ方について 12
4 色のことば「マリン・ブルー」 21
5 待望久しきハンディな辞典 25
6 二十一世紀への希望 25
7 H・ジェイムズ『ガブリエル・ド・ベルジュラック』 27
8 『新訂故宮博物院物語』を読みて 31
9 日本近代文学館理事長就任の弁 34
10 裸体美という可能性 35

11 日本近代文学館理事長に推されて 39
12 西欧的教養人芹沢さんの思い出 42
13 花袋全集刊行を祝す 45
14 ミロになるまで 46
15 パルコ四十周年記念アンケート 50
16 中国映画『乳泉村の子』を観て 51
17 わが読書 54
18 わが古典『魔の山』 60
19 老年と青年のまだら模様 64
20 「一枚の絵」創業二十五年に寄せて 69
21 近代文学研究への新しい道 70
22 球体と精神 74
23 旧友堀田の全集のはなむけに 75
24 「高原」の頃 79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

25 推理小説の思い出 81
26 阿部知二の小説の問題 83
27 紅葉小説の現代性 95
28 瑤子さんの思い出 98
29 森瑤子さん追悼 102
30 『滑稽旅役者物語』の刊行に寄せて 105
31 『テラスに立つ少年』 106
32 「戯作三昧　一塊の土」解説 107
33 森光子と魂の喜び 112
34 文学における「男の涙」 113
35 『浮世絵のなかの子供たち』 116
36 指先の偶然から魂が現前する 116
37 『マシアス・ギリの失脚』を推す 117
38 庭園をめぐる想い出 119

II　西欧二人三脚紀行

39　1 出発　125
40　2 事はじめパリ暮し（佐岐）　127
41　3 四居の主　129
42　4 引越と再会（佐岐）　132
43　5 日常生活はじまる　134
44　6 南仏の旅、ジャコメッティ夫人を偲ぶ（佐岐）　136
45　7 十字路の都・パリ　138
46　8 またの引越とパリのおしゃれ（佐岐）　141
47　9 季節の賑わい　143
48　10 パーティーとレヴェイヨン（佐岐）　145
49　11 病気と十五世紀　148
50　12 ペール・ラシェーズへの墓参（佐岐）　150

51 13 文芸サロン 153
52 14 帰国（佐岐） 155

III

53 幻想ベストブック 1987-1993 161
54 生れた時から作家 162
55 現代における立原道造 165
56 わが俳友上田五千石 168
57 現代画家岸田夏子 170
58 国際交流のための三つの条件 171
59 パリ・一九九三年 172
60 貧乏についての私的、哲学的考察 175
61 文学百年の決算 上 179
62 文学百年の決算 中 182

63 文学百年の決算　下　185
64 一九九四年四月二十九日の感想　188
65 私の外国語上達法　192
66 詩人西脇順三郎の孤独　195
67 思い出の作品、あるいは「師の恩」、小品『窓』　197
68 日本語の豊かさの回復のために　200
69 長年の憂慮のようやく晴れようとするに当って　201
70 蛇笏との出会い　202
71 ヘンリー・ジェイムズと私　205
72 『新文学研究』復刊を推す　207
73 近代文学手稿百選編集にあたって　208
74 私の好きな海外ミステリー・ベスト5　209
75 軽井沢と文学　211
76 花袋全集第II期を推す　217

77 空想の図書館について 218
78 戦後文学半世紀の展望 上 222
79 戦後文学半世紀の展望 下 227
80 作家の孤立（日記抄） 233
81 私の本整理術 236
82 花袋の最後の作『春草』を巡って 240
83 『雲のゆき来』の頃 243
84 近世知識人の大集会 244
85 ラヴェンナの中央広場のカフェ「黄金の盃（タッツア・ドーロ）」 245
86 私の死生観 248
87 私の文章術 251
88 芹沢光治良追悼集、序にかえて 255
89 吉行君とのこと 257
90 発光妖精とモスラ 263

テラスに立つ少年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

1 断絶の現代

大正七年戊午、西暦でいえば一九一八年生れの私は、平成五年癸酉の新春を迎えて、七十五歳ということになった。

私の生れた年に七十五歳の老人だった人は、実に天保十四年の生れで、彼は明治維新や文明開化を経験したことになる。

私は幼時、銭湯のなかで、実際に天保生れという老人に昔話を聞かされたこともあるし、ということはその禿頭(とくとう)の洒脱な老人は、館(たち)柳湾や為永春水や渡辺崋山や間宮林蔵と同じ空気を吸って生きていたということになるのだし、また現に私の曾祖父は西南の役に出征した黒い軍服を持っていたし、祖父は日清日露役に従軍したので、フランス語とロシア語の日常会話用の小冊子の軍から支給された珍しいものを持っていて、私が小学校で、「センチ・メートル」という単位を習って帰ると、祖父は「サンチ」ではないかと、フランス風の発音になおそうとした。

今年生れる人たちは、私のことを同様に、西田幾多郎や島崎藤村や吉田茂と同じ空気を呼吸し、関東大震災と東京大空襲とを経験し、ソ連の共産主義実験の最初から最後までを見とどけた珍しい老人だとして記憶するかも知れない。

今から十数年前、パリに行き、娘が友達と電話で話しているフランス語がさっぱり解らないので、すっかり自信を喪失したところが、フランス人の友人が、自分も息子の喋る言葉がほとんど理解できないと告白したので驚いた。

そのフランス人は、当時「年齢の戦い」という言葉がはやり出していて、世代の間の断絶は世界的な傾向なのだとなげいていた。

実際、江戸時代には時間の流れは、眼に見えないくらい緩やかで、武士も町人も百姓も、家業は世襲制であったから、親の生き方や話し方を学んで育ち、やがて親の名や地位を受けついで世に出て行くので、そこには連続があり、断絶はなかった。

ところが近代社会においては、親と子とは職業もことなり、その中に生きる社会体制さえちがっているから、人生観もイデオロギーも別のものである。

現に私の亡父は、「自分は資本主義の発達と共に育ってきたから、キャピタリストとして生涯をおえるが、君は社会主義者になるだろう」と、幼い私に予言したが、歴史はその予言をも追いこして、混合経済という新しい社会体制の実現を見るに至っている。そうして、人生の黄昏にいる私には、明日の世界のイメージは全く見えないのである。

これはフランス革命直前や、アメリカ南北戦争直前、また明治維新直前に世を去ることになった老人にとって、その未来が明るく輝かしいものに見えていたのとは、何という相違だろう。

人は生涯をおえる時、安心立命の境地に立ちたいものである。わが平安朝の貴族たちは死に臨んで、

西方浄土から阿弥陀如来が迎えに来る幻影を見ながら息を引きとることができた。しかし二十世紀末の世界のどこに、明るい未来図を眺めながら眼を閉じられる幸福な人間がいるだろう。

百年前の世界では、人々は科学による文明の進歩と、その結果、地上から飢餓と戦争とは消滅するという希望をもって、世を去ることができた。

そして、希望をもって世を去るというのは、実はそういう形で、死後もいのちを長らえることなのである。しかし、現代の私たちは、世代の断絶によって、生きながら足もとから連続を断ち切られ、若者たちにとっては私たち老人は、既に死ぬずっと前から死んだも同然なのである。

そうした状況のなかで、フランスのある将軍のように「彼は死ぬまで生きていた」と言われるように、断乎として自分自身の人生を生き抜いてやろうと、私は新春を迎えて、もう一度、決意を新たにしている。勿論、寛大な微笑と共に——。

2　友よ、安部公房

安部公房の突然の死は、日本現代文学における前衛の理念の死を意味する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com